

平成 23 年度

地域づくり研修交流会 in 中之条

町長 入内島道隆 さん



中之条町のまちづくり

平成 23 年度地域づくり研修交流会は、人口 18,000 人の町に、開催期間中 350,000 人を呼び込んだ中之条ビエンナーレを視察しました。

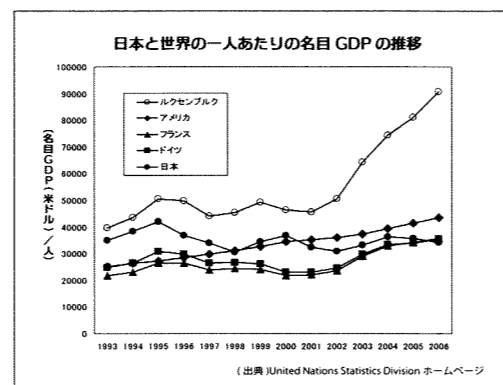
オリジナリティー溢れる政策で町を盛り上げている、入内島道隆町長に中之条町のまちづくりについて講演していただきました。

平成 22 年、中之条町は合併により面積 440 平方キロメートルとなり、群馬県で 4 番目の広さになりました。人口は 18,000 人、典型的な過疎の中山間地です。この町で何が出来るかを真剣に考え続けていますが、『マネジメント』の著者であるピーター・ドラッカーは、「未来を予測する最良の方法は、未来を作ることだ」と言っています。私たちがこういう地域にしたいという想いを、形作るように努力していくことが未来を作ることになるのです。

田舎というのはどうしても都会のほうを見て、「田舎には何も無い」と、無いものづくりの議論をする傾向があります。そういう意味では過疎の歴史は、都会へのコンプレックスの歴史であったといえます。しかし、実際には自分たちの足元を見つめ、資源を生かしたまちづくりをしているところが輝いているのです。ですから、今そこに住んでいる人達に、どうしても田舎の良さを分かってもらいたいと思っていました。

美しい村社会を残していくことが人類にとっては大事だということをヨーロッパではすでに認識しており、「世界で最も美しい村」連合という美しい村を残す動きが始まっています。そして、ついに日本でも 2005 年「日本で最も美しい村」連合が北海道美瑛町を中心に出来、中之条町も加盟しました。現在、フランス、イタリア、ベルギー、カナダ、日本の 5 カ国が世界連合を作り、イギリス、ドイツ、ギリシャでも世界連合に加盟しようという機運が高

まっています。そのようにして村の良さを分かっていたら、それをベースにしていくということが、大事ではないかと考えています。

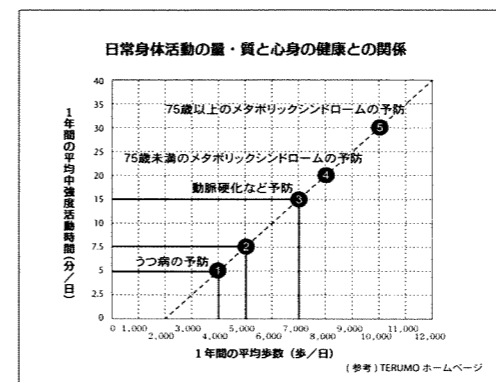


ところで、グラフは日本と世界の一人当たりの GDP を比較したものです。1993 年時点では、日本の一人当たりの GDP はルクセンブルクに次いで世界で 2 位の 35,000 ドルで、非常に高い生産力を誇っていました。ところが 2006 年になると日本は 18 位にまで落ちています。一方でルクセンブルクは 1 位を保っています。このような差が生じた原因として考えられるのは、日本が成長分野に投資してこなかったことだと思います。このデータは 2006 年のもので少し古くなりますが、この時点で金融、IT、資源というものに力を入れている国の一人当たりの GDP はずっと伸びていますが、製造業のままの国は停滞しています。フランス 16 位、ドイツが 17 位、日本が 18 位となっていますが、この 3 国は製造業主体です。日本は、成長分野に投資してこなかったために、失われた 20 年を作り出してしまったことがグラフから読み取れます。

もう一つこのグラフから読み取れることは、このような状態にあったため、日本の財政赤字が一向に改善されなかったことです。一人当たりの GDP が伸びていけば、当然税収も上がりますので財政赤字も解消されますが、ずっと停滞していたため、どんどん債務が積み上がってしまったのです。

※GDPとは「Gross Domestic Product」の略。国内総生産。「売上-経費=儲け」となるが、その「儲け」を日本中全部合計したものがGDPとなる。

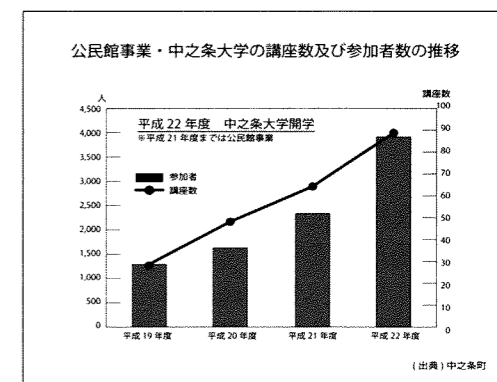
成長戦略の欠如が財政を悪化させた一因であります。さらに大きな要因として、少子高齢化による社会保障費の増大があります。すでに中之条町では、制度そのものではなく、一人一人の生活習慣を改善していくことで、この問題を乗り越えていこうと思っています。東京都健康長寿医療センターの青柳先生にご協力を頂いて、ライフコーダによる生活習慣の改善を進めています。いわゆる万歩計ですが、通常のものに加速度計が付いています。一般には一日 10,000 歩歩けば理想的と言われていますが、歩数のみでは不十分です。早歩き程度の中強度の活動時間が 20 分以上必要であり、歩数では 8,000 歩で十分効果があるということです。例えば、①4,000 歩で中強度の活動が 5 分以上あれば、うつ病の予防。③7,000 歩で中強度の活動が 15 分以上あれば、動脈硬化の症状の改善に繋がります。テルモのホームページにも「中之条研究」ということで掲載されています。



ライフコーダを着けている人と着けていない人を比較すると、医療費が約 20%近く違っていますので、もし仮に着けているみなさんが中強度の運動を 20 分以上行い、一日 8,000 歩を継続すれば、20%どころか 50%以上の生活習慣の改善につながるわけです。毎日 8,000 歩とまではいかなくても、20%は改善されるわけですから、多くの方にライフコーダを着けていただき、おのおので生活習慣の管理ができるようにしたいと思います。

健康な体を取り戻せた後は、生きがいや趣味を持っていただくことが大事だと思い、「中之条大学」を創りました。そのヒントは、「愛・地球博」にありました。総合プロデューサーの涌井先生のお話の中で伺いましたが、愛・地球博にはボランティアが 50,000 人参加したそうですが、その期間だけは医療費が半分になったそうです。この事例から、個々の生活を充実させることが社会保障の問題に取り組むことになるのだとわかります。

中之条大学では、まずファーストステップとして“300 サークルから 3 つの趣味”というものを打ち出し、多くの方に趣味を持っていただくことをお願いしました。そうすることでいろいろな交遊関係が生まれ、家に引きこもらずに生活していただけたと考えたのです。その講座は多種多様あり、ただ単に学ぶだけでなく、場合によっては教える側にも回ります。ヒップホップダンス、町の施設を巡る、山登り、読み聞かせ、お寺でお坊さんから仏教のお話を聴く、子供たちが地元の方から太鼓を教わって発表する、パソコン教室、おやき教室、しめ縄づくり、野反湖で魚の放流、わら草履作り、竹細工…等、多種多様な講座を用意することでいろいろな方に参加していただけるようになっています。平成 19 年度は講座数が 30、大学を設立した平成 22 年度は講座数が 90。参加する方も 4,000 名を超えています。延べで数えればもっと多くなります。人口 18,000 人の町の 4,000 人が何らかの形で携わっているのは、かなりの参加率の高さです。職員も「参加した町民の方から喜ばれ、感謝されて、この仕事を担当させてもらって本当によかった」、「60 代 70 代の方が『この年になって大学生になれるなんて嬉しいね』と言いながら帰っていく姿を見て、涙が出そうになった」と言い、張り切ってやっています。



町では、地域、年代ごとに 2 年に 1 度 2,000 名の方を無作為で抽出して町民アンケートを実施しています。町民の方に 39 項目の満足度を 7 段階で評価していただき、それを分析して町が力を入れる分野はどこなのかを調査しています。中之条大学について、参加していない方からはどうしても否定的な意見が出てきてしまっていますが、参加した方にはずいぶん変化があった様で、大変好意的な意見をいただきました。やはりこういうことは、数値や経済効果としては出て来づらいものですが、行政が人の幸せを考える上では、非常に重要なことだと思います。